

# 運命鉄道 1 1 1



インチ・バイ・インチ

SF童話

# 運命鉄道 1 1 1

<<序章>>

時は2000年ミレニアム、ニューヨークで  
中国の科学者と世紀の大魔術師の対決  
がはじまった。

作：インチ・バイ・インチ

## 1 章：科学者 VS 魔術師

2000年、ニューヨーク

中国人の科学者、王さんが、愛犬のシェパード犬を連れて友人の家に向かっていた。

「ワン公よ。今日の空に浮かぶ雲はいくつだ？」

「ワン。」

「よろしい。実にすがすがしい、晴れた朝だ。」

そこへ現れるナイフ男。

ナイフ男は、「金か？それとも死にたいか？」

王さん「死にたいね。」

ナイフが突き出された！

しかし、王さんの胸から青い光が一筋伸びて男をはねとばした。

「護身用の怪力光線だ。俺は科学者だ。」

それから5分歩いて王さんは、友人ゾーベラーの家についた。

ゾーベラーは日本風の家ですんでいたが、室内は西洋式だった。

王さんは、彼がよくテレビにでて不思議な術をつかうのをよく知っていた。

王さんは彼の術を科学的に解明しようとして、ここによく来ていた。

ゾーベラーはいった。

「王、今日は私の考えた、世界で最大の奇術をきみにかけてやろう！きみが、この奇術のタネを見破ることができたら、きみは有名になれるぞ！」

王さんは「いいとも。きたまえ。」

ゾーベラー「まず、きみの犬を人間にしてやろう！」

「えっ！！！」

ゾーベラーが犬をカーテンに投げた。

バリバリバリ！！

凄まじい電光が走り犬が立ち上がった。

2本の足で！

「これできみらは、一緒に冒険できるだろう。」

王さん「なんのことだ！」

半分怒りを感じながら、王さんが立ち上がると、ゾーベラーが術をかけた。

バババババ！！

カーペットが王さんと犬をつつみこみながら放電した。

スピーカーがベートーベンの運命を鳴らした！

ダダダダーン！！

「さらば、王！死の旅へ！」

-----ここからは、夢の中の世界です-----

## 2章：111 トリオ結成

### 子どもの夢の国

王さんの意識が戻った時、目に見えたのは王さんを見下ろす愛犬の顔だった。

王さんは犬が2本足で立って、王さんを助け起こしてくれたので、夢をみていたのではないことに気が付いた。

「ここは？」

「ワン！」

「そうか、頭だけは犬だもんな。しゃべれないはずだ。」

王さんは、周りを見回した。

森がひろがっている。

寒い！

と、ポーーーーッ！という音が聞こえた。

遠くに煙がのぼっている。

しだいに近づいてくるのは、なんと、機関車だった。

機関車は2人の前で止まった。

なんとしゃべり出したのだ。

「私の名前はE1・・・イワンです。おぼえてらっしゃいますか。」

王さんはハッとしました。

「おれのおもちゃの機関車・・・イワン！おまえか！」

E1は言う。

「そうです。あなたが母親に買ってもらったメイド・イン・ジャパンの機関車です。あ

あなたが10歳の時、勉強の邪魔になるという理由で焼却炉いきになりました。でも、あなたの心の中にはいくつになっても私のことが、どこかに残っていた・・・」

王さん「するところは！」

E1「そうです。子どもの夢の王国の一部です。」

王さん「すると我々は、夢の一部に加わってしまった。いったい何がおこったんだ！」

E1「子どもの夢の国は、子どもと、一部の夢がすてられない大人の、夢のイメージの世界です。でも、最近になって、彼らの夢は汚れつつある。邪悪な心をもった何者かが干渉したのです。その者はマスターとよばれ、なぞの存在です。マスターはここにはいりこんで勝手なふるまいをする我々をつぶそうとするに違いない。そう、我々だけが、マスターが操ることのできない夢なのだから・・・」

王さん「マスターをつぶしてやる。」

犬「ワン」

E1「では、トリオを組みましょう。王さん、ワン公、イワンにちなんで———そうですね。111トリオでどうでしょうか？」

王さんとワン公はE1にのりこんだ。

「発進！」

シュッシュッシュッシュッ！

-----ここからは、夢の中の世界です-----

### 3章：危機一髪

#### 子どもの夢

森の寒さは、次第にやわらいできた。

E1「この冷気は、子どもの夢に対する現実世界の冷たい対応です。」

森をぬけると、ローマのコロシウムが近づいてきた。

歓声がわきあがっている。

王さんとワン公は、群衆をかきわけ入っていき、中央で戦う剣闘士を見た。

それは、太ったガキ大将と病弱なチビッコであった。

太ったガキ大将はなぐりつけるが、チビッコは姿をけし、キック、パンチ、頭突きの連打を決め続けた。

とうとう太ったガキ大将はうしろにふっとんで気絶した。

チビッコは雄たけびをあげると、赤いスカーフをなびかせ勝者として退場した。

次の剣闘も同じであった。

めがねのがり勉を5人の不良が取り巻いた。

しかし、がり勉のフットワークは蝶のように軽く、不良はからまわりしてとうとうがり勉は5人の不良を始末してしまった。

「なんだこりゃ。」

王さんとワン公がコロシウムをでると、E1が説明した。

「あれは、差別やいじめをうけてる子どもがもつ白昼夢なんです。子どもたちはストレスを空想することによって転嫁を計るのです。」

しばらくすると、線路が二又にわかれた。

ところが、一人のラッパを持った天使が降りてきて切り替えポイントをE1の進行方向と逆にきりかえたではないか！！

E1「大変だ。マスターの使いだ。」

E1は進路を切り替えられなすすべもなく傾く大地を加速して下りはじめた。

天に巨大なラッパの音が響き、天はカーペットをまくように焦げ落ちた！

星もおちてくる。

大地に巨大なクレーターができる中、汽車は疾走する。

「世界がほろぶ子どもの夢か！」

E1の直後の大地が割れ、せりあがる！

「世界の果てが近づいてきた！！」

大洪水の起こる絶壁に線路はむかっていた。

そして暗黒の雲の中から、次元空間が割れ、悪魔の口そっくりに笑う！

E1「このままでは食われる！！」

王さん「E1、お前の胴体に俺が6歳の時仕込んだ花火(ロケットランチャー)は！」

E1「そうか。でも点火しないと！」

ワン公「ワン！！」

ワン公は発煙筒を握って汽車の側面を伝いだす。

E1「もう遅い！」

王さん「E1、8歳の時に仕込んだ、ブレーキは！」

ギャーッ！！

ブレーキがかかりレールに火花が飛び散る。

悪魔の口が広がってくる。

絶壁の上で停止した、機関車に波がたたきつける！  
ワン公が機関車の底にたどりついた。

すぐ点火され花火が5、6発悪魔の口に飛び込んだ！  
ズズーン！！

天に巨大な太陽となって、悪魔の口は消えた。  
視界が戻ってきた時、すでにあたりの様子は様変わりしていた。

## 4章：女戦士との出会い

ファンタジーの国

-----ここからは、夢の中の世界です-----

あなたの犬がみあたりません。おそらく、火薬の衝撃で、どこかわれわれのいる夢とは別の夢におとされたようです。」  
王さん「ああ。再会させてくれ。夢よ。」

ここは、どうやら、幻想の国らしかった。羽のはえた小人が花にすわり、穴から、小妖精が顔をのぞかせた。

王さん「われわれはレールの上にはいないな！ノームと仲良くなって、オイルでもさしてもらっててくれ。なんとかする方法を探しに行くよ！」  
(ノームは、穴に住みながら、機械をもあつかうそうだ！)

王さんは、森を通りながら、仲間が自分から、徐々に離れてしまっていることを特に今まで夢の世界を説明してくれたE1が動けなくなったことについて考えていた。  
これからは、独りでマスターに立ち向かわなくてはならないのだろうか？

考えているうちに喉がかわき、湖が見えてきたのでそこへ向かうことにした。

一人の北欧系の美女が、水浴びをしていた。

ニューヨークの歌手などとは、比べられないほどの、本当の体格をしていた。北極熊と格闘できそうだ！

その時だった！！

水中から、小人の魚人が3人飛び出してきたのだ！

王さんはびっくりして腕輪にしこまれた、仕掛け矢に手をかけた。

美女は少しもあわてず、片足をひくと、石をすくいあげ、魚人の一人の肺を潰していた。

王さんがもう一人の頭を矢で打ち抜く！

彼女は三人目を抱きかかえると、背骨をへし折った！

血を吹いて崩れ落ちる。

「助けてくれてありがとう。私はスワン。湖の女騎士。」

スワンは、岸にあがると、鋼鉄の胸当てをかぶり、剣帯を腰につるした。  
彼女は、ある遺跡の神と対決にいくのだと言う。  
スワン「あるいは、その神を倒せば、その機関車は別の夢に移れるかもね。」  
他に方法はないのだろうか？

スワン「それに、あなたの言った世界の滅亡は、伝承では500年前にあったことなのよ。」

なぬ？

二人は砂漠を通過して、遺跡を見た。  
確かに、数百年前の石板があり、狼の頭を持つ死神が描かれていた！  
二人はピラミッドの前にきた。狼の像の足元の門をくぐる。  
しばらくいくと、登り坂……ざざざざ！！  
巨大な石板がすべってくる！！  
怪力光線が破壊し、あたりに土砂がふりそそいだ！  
ガガーン！！

王さん「げほっ」

スワン「まだまだよ。油断しないで！」

登り終えたころ、巨大な咆哮がした。  
体長5メートルあるかと思われるライオン！！

二人は奥へと全力で逃げ出した。

王さん「しまった！いきどまりだ！」  
スワンが長剣を抜き放つ。

ライオンがいちはやく片足でつぶし、血が壁に飛び散る！！

王さん「スワン！！もうだめだっ！」

ぎゃうーんん！！

スワンがべとべとになって立ち上がった。  
スワンの剣はまっすぐライオンの足に入っていた。  
ライオンは逃げざまに坂を転げ落ち、土砂でもがいた。

(シェパード人；ワン公)

背後から、なにか背の高い人物がたちあがった。  
すぐさまスワンが短剣を投げはなした。  
王さんは倒れる人物にハッとして駆け寄った。  
王さん「やっぱりワン公だ。500年も……俺を待っていたのか……」

王さんにはわかった。

シェパードの顔を持つ人間を、人々は死神として祭ったのだ。王さんはちいさいころから、ワン公をレンガの小屋で飼っていた・・

「見事じゃ！」老婆があらわれた。

「わしは夢の老婆。お前らの武勇を見込んで、111トリオをマスターの要塞へ送り込んでやる。成功を祈る。」

老婆の腕の回転とともに、スワンを加えた111トリオはこの夢から別の夢へ入っていった。



ワン公!!!

-----ここからは、夢の中の世界です-----

## 5章：マスターVS科学者

未来のニューヨーク



(近未来スワン)

王さんがつぎに目覚めたのは、機関車の中だった。

王さんの傍らにスワンが体にぴったりしたスーツを着て弓にもたれかかってすわっていた。

真紅の皮でできた、紺のラインのトラックスーツ。

E 1 の改造された車体はいろいろな機械装置が取り付けられていた。

しかも時速150キロ以上で疾走している。

「ここはいったいどこなんだ。

E 1 ?」

E 1 「ロボットが暴れ、武装車が走り回り人々が装甲ビルに立てこもっている、未来のニューヨークです。」

スワン「武装車がきたわ！」

E 1 の正面から、スーパーカーが対戦車砲を撃ち、レールの側面にクレーターができあがった！

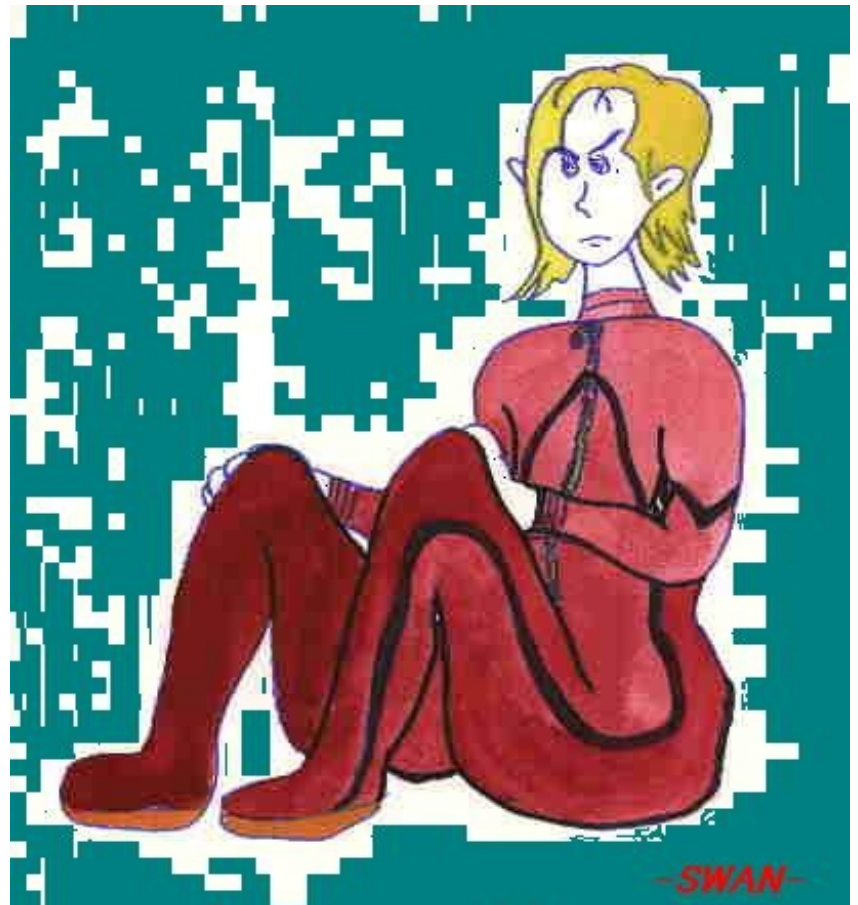
ガガン！！

E 1 「こちらも、重装甲とレーザー砲2門で迎え撃ちます」

E 1 とスーパーカーのすれちがいざまレーザー砲が、重タイヤを撃ち抜いた。武装車は250キロで横転し大爆発した。

E 1 「われわれは、地下鉄を通過してマンハッタンのエンパイアステートビルのマスターのところにとどり着かなくてはなりません。ペンシルバニア駅で私の任務は終了です。あとをたのみます。」

地下に入ると、大型工業ロボットが行く手をふさいできた。



E 1 「しっかりつかまってて！」

バガン！

ロボットは正面から、E 1 にくみついた。

E 1 はレーザーでロボットを切り離そうとする。

王さん「前にバリケードがあるぞ！！だいじょうぶか？」

グワッシャー！！

ロボットはバリケードに当たり、ばらばらに壊れ去った。

同時にE 1 はバリケードを突破した。

その、速度がおちたところへ天井に2体のアンドロイドが飛び乗ってきた。

スワンが現れ、一体の単眼を弓で撃ち抜いた。

もう一体は反対側でE 1 の電気回路をショートさせていた。

スワンはうしろから、組みついたが、パワーがちがった！

アンドロイドは天井にスワンを組み伏せると、鉄片で顔をつこうとする。

顔がすれすれにかわし、鉄片が開けた穴から、蒸気が噴出した！

ロボットは蒸気で跳ね飛ばされた。

E 1 がとまった。

「ペンシルバニア駅です。」

王さんとスワンは階段をかけあがり、オートバイにまたがって走り出した！  
道をふさいでいるバスも怪力光線で破壊し、二人をとめるものはなかった。

「さあ、エンパイアステートビルだ。E 1 ? 奴は何階だ！」

腕時計が無線になっていて答えた。

E 1 「マスターは、夢の中に入り込む時は、必ず放電した分身の形をとります。

今、マスターは最上階です。にがさないで！」

王さんとスワンはエレベータに乗り、最上階についた。

ドアが開くと、青いプラズマが散った！二人は逃げていく人影を追った。

電気を散らばせる人影、マスターは一台のコンピュータのディスプレイに吸い込まれてしまった。

「夢からでたな。俺が、同じようにでるには、ここにパスワードを入力しなくては。。

までよ。もしや、、」

王さんはキーボードをたたいた。

ベートーベンの運命のメロディが演奏された。

王さんの体が電気に包まれた。

「さようなら、夢の住人スワン。ねがわくば、夢でまた会おう。」

王さんがディスプレイに吸い込まれた。

(逃げるゾーベラー)

## 6章：決着—夢の価値について

2000年、ニューヨーク王さんは現実の世界に戻っていた。

空に雷が鳴っている。王さんはスーパーにはいると、CDラジカセと”運命”のCDを買った。そして、奇術師ゾーベラーの家に庭に入りこみ、居間にいるゾーベラーに「おい！！」といった。

ゾーベラー「まさか、生きてかえってくるとはな・・大したやつだ。」

王さんは答えた「俺は夢で愛犬を失い、懐かしいおもちゃを傷つけられ、人生で最高の女性と離れることになった。このツケは払ってもらおうぞ。」

ゾーベラー「俺に勝てるとでも？」

王さん「こいつをくらえ！」

ダッダッダッダーン!!!!!! ベートーベンの運命でゾーベラーの身体が電気に包まれた！

「うおーおーっ！」

同時に雷が家に落ちた！！

ガラッピシャーン！！

家が燃え、王さんは歩み去った。



サイレンの音が遠ざかっていった。

「あばよ、ゾーベラー。地獄の夢であおうぜ。いや、マスターというべきか。」

次の日の朝、王さんの家に子供たちが押し寄せてきた。

「王さん。スワンにきいたよ！」

「ぼくらの悪い夢を退治したのは、王さんなんだって。」

王さん「みんな、夢を大事にするんだよ。大人になっても夢をもちつづけるんだ。」

-----**END**-----

## 運命鉄道 1 1 1

<http://p.booklog.jp/book/98750>

著者 : beroman

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/beroman/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98750>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98750>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ